



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スラヴ語話者のための日本語音声表記：1. ポーランド語の場合
Author(s)	和田, 弥恵子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 2, 41-57
Issue Date	1998-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45561
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC002_005.pdf



スラヴ語話者のための日本語音声表記

1. ポーランド語の場合

和田 弥恵子

要 旨

日本語の発音指導において、学習者の母語の音声に関する知識は非常に重要である。音声を表記するためには、国際音声字母 (IPA) が現在世界で使用されているが、語学書や辞書の中にはIPAと一部異なる記号で発音表記されているものもあり、複数の言語の発音比較の際や、教師が精通しない文字の発音を調べる際に不便である。

また、仮名習得を必要としない学習者に対する日本語教育では一般にローマ字表記が用いられているが、日本語ローマ字表記の文字と音声の対応関係が、学習者の母語と異なることもあり、その場合には学習者に誤った発音を想起させる結果を招くこともある。より効率よく日本語の発音を把握させるためには、学習者の母語の文字表記習慣に則った音声表記が有用であろう。

本稿では、スラヴ語の中からポーランド語を取り上げ、まずスラヴ語全般に関する背景知識について述べた後に、ポーランド語の音をIPAで確認し、音声的特徴をまとめた。最後に、ポーランド語話者のための日本語音声表記を試みた。

〔キーワード〕 スラヴ語 ポーランド語 国際音声字母 (IPA) 日本語音声表記 ローマ字表記

1. はじめに

日本語教育の発音指導において、学習者の発音の問題点の原因を知り、指導の方法を決定するために、学習者の母語の音声に関する知識を持つことは非常に有用である。音声の表記には、国際音声字母 (IPA) が現在世界で広く使用されているが、語学書や辞書の中にはIPAと一部異なる発音表記がなされているものもあり、発音比較の際などには不便である。例えば、スラヴ語の場合にはč、žなどの記号が使用されることがあるが、

それがIPAのどの記号の音声と対応、或いは類似しているのか、即座に知ることはできない。

一方、非日本語話者が日本語の音声を習得する際には、ローマ字表記が大きな役割を果たしていると考えられる。特に、仮名使用開始以前の学習初期段階の学習者や、仮名習得を必要としない学習者が、効率よく日本語の音声を把握するためには、ローマ字により正しい音声想起されることが必要である。現在、ローマ字の綴り方にはヘボン式、訓令式、日本式、他に各日本語教科書で独自の方式が採用されている場合もあるが、学習者の母語によっては文字と音声の対応関係が異なり、ローマ字が学習者に誤った発音を想起させることもある。そのため、特に仮名を使用しない日本語教育においては、学習者の母語の文字表記習慣に則った柔軟な音声表記を採用することが有効であろう。

本研究は、印欧語族スラヴ語派の言語の発音をIPAを用いて確認した上で、スラヴ語話者のための日本語音声表記を作成することを目的とするが、本稿ではポーランド語を取り上げる。はじめに、スラヴ語全体に拘わる歴史的背景について触れておきたい。

2. スラヴ語について

2.1 スラヴ語派

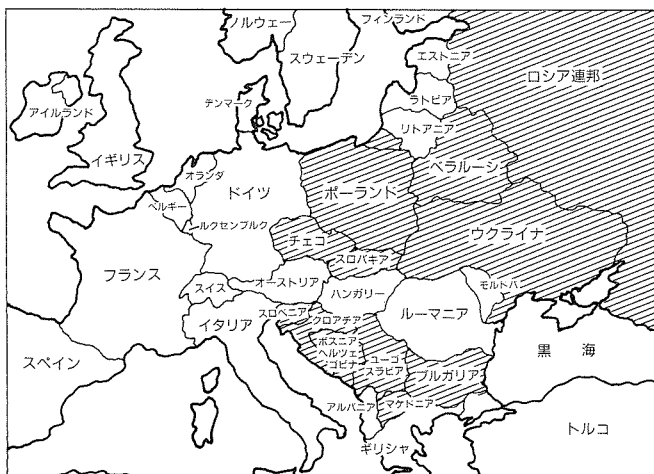


図1 現在のスラヴ圏

スラヴ語は、ゲルマン語、ロマンス語等と並び、インド＝ヨーロッパ語族に属する有力な語派の一つである。スラヴ語が話されている地域は、旧ソ連、及び東欧と呼ばれてきた地域にまともっている。しかし、多民族国家であった旧ソ連の中でスラヴ民族で構成された共和国は、ロシア、ウクライナ、ベラルーシのみであり、また、東欧の中でも、ハンガリー、ルーマニア、アルバニアはスラヴ系ではない。

スラヴ語は、東、西、南の3グループに分かれる。地域的に旧ソ連に属する東のグループの3言語は、14世紀頃まで古代ロシア語として1つの言語と見なされていたもので、非常に近似している。東欧地域のスラヴ語は、ハンガリーを境に西と南に分かれる。

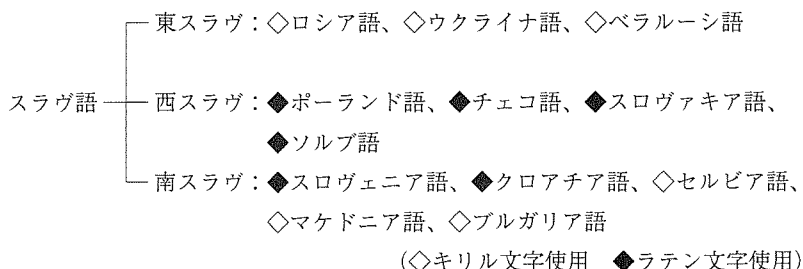


図2 スラヴ語派の中のグループ

ハンガリーの存在がスラヴ圏に与えてきた影響は非常に大きい。マジャール人（ハンガリー人）がアジアから移動し、スラヴ世界に定住を始めたのは10世紀頃であるが、これにより西スラヴ民族と南スラヴ民族が分断され、言語上の共通性が失われていった。マジャール人自身は、フィンランド語などと同じウラル語族に属すマジャール語（ハンガリー語）を保ち続けた。言語面のみでなく、ハンガリーがキリスト教を西方から受容したことにより、東方ビザンティン勢力の西スラヴ地域への進出が阻止された。そのことにより、スラヴ世界の中での東方正教圏とカトリック圏の境界が生まれ、西スラヴの宗教的・文化的特徴が決定される結果になったのである。

東スラヴと南スラヴを隔てているのはルーマニアである。国家が成立したのは19世紀半ばと新しいが、その地域を支配した様々な民族の影響を受けつつ、ロマンス語派に属するルーマニア語を保ってきた。

ハンガリーが非ヨーロッパ、ルーマニアが非スラヴとしての性格を保ち

続けているのに対し、元来トルコ系であったブルガリアは、9世紀頃から次第に言語的、文化的にスラヴ化を進め、現在ではスラヴの一員に数えられるようになった民族である。ブルガリア語は、南スラヴのグループに属するが、マケドニア語と共に周辺のルーマニア語、ギリシャ語などからの影響を受け、他のスラヴ語とは多少異なる特徴を持っている。

2.2 スラヴ語の文字

ロシア語の文字として知られるキリル文字は、9世紀にスラヴ語のために考案された文字であるが、すべてのスラヴ系言語がキリル文字を使用している訳ではない。図2にも記した通り、ポーランド語等、主に西スラヴの言語ではラテン文字が使用されているが、スラヴ語特有の音の表記のためには、補助記号を付したり子音字を重ねて1つの音を表す等の工夫を要するので、視覚的に若干複雑になる。それにも拘わらず、スラヴ語の中でもキリル文字を使用しない言語がある背景には、宗教上の伝統が深く関与している。

現在キリル文字を使用している国の大半は、キリスト教の中でも東方正教を主要な宗教としている。キリル文字は、ギリシャ人によるスラヴ人へのキリスト教伝道のために、ギリシャ文字をもとに考案されたものであり、古代教会スラヴ語の文字として使用された。典礼語の表記が、東方正教会ではキリル文字、西方のカトリック教会ではラテン文字であったため、それにより各スラヴ語で採用する文字が決定したのである。そのため、東方正教が主要宗教であるルーマニアでは、使用言語は非スラヴ系であるが19世紀までキリル文字が採用されており、一方カトリックが主要な宗教であるポーランドでは、言語はスラヴ系であるがラテン文字が使用されてきたのである。また、旧ユーゴスラヴィア連邦が解体するまでは一語として扱われていたクロアチア語とセルビア語は、互いに宗教とそれに応じて使用文字も異なり、前者がカトリックでラテン文字、後者は正教会でキリル文字を採用しているが、文字以外は非常に近似している言語である。

スラヴ民族の間にキリスト教が広まったのは9世紀から12世紀にかけてで、それにより国家統一や学問の発展が大きく促された。東西のキリスト教会は8世紀頃には激しい対立を見せ、スラヴ圏への伝道もそれぞれに行っていた。スラヴの国にとっては、キリスト教の受容がどちらの教会を介してであったかにより、以後の宗教的、政治的、文化的特徴が決定される

ことになった。

このように、スラヴ世界は言語的には東、西、南の3グループに分かれるが、宗教的には東方正教圏とカトリック圏に二分され、その区分が使用文字にはほぼ対応している。この宗教と文字の違いは、政治的、文化的伝統も含めた相違として現在も現れている。この相違に注目し、近年「南東欧」「東中欧」という新しい区分により東欧を分けて論じるようにもなってきた。従来の「東欧」という地域区分は、18世紀頃には「東欧＝スラヴ世界」という考えからロシアも含めて捉えられていたこともあったが、現在は、「第二次世界大戦後に誕生したヨーロッパの社会主義国」という政治的な規定により、オーストリア、ギリシャを除き、他方で東独を加えた、旧ソ連とドイツとに挟まれた地域とするのが一般的である。しかし、1989年の東欧革命を経た今日では、この従来の規定に拠らない区分が必要となり、西欧と関係を強く持つカトリック圏の「東中欧」と、ロシアと比較的緊密なバルカン半島の諸国で東方正教圏が主の「南東欧」に分けて論じられるようになりつつある。そのような差異に注目した新しい区分の端緒が、キリスト教受容時に遡ることができるのは興味深い。

3. ポーランド語について

3.1 ポーランド語のアルファベット

ポーランド語では、他の西スラヴ語同様ラテン文字が使用されているが、スラヴ語特有の音を表記するために、補助記号が付されたり文字が重ねられたりする。後者の例には sz、rz、cz 等がある。

ポーランド語は母音数が少ない割に子音数が多く、最大5個まで子音が連続して発音されることもある。また、アクセントは強弱アクセントで、アクセントがある音節の母音が多少長く発音される他は、長母音や二重母音もないため、子音の響きが目立つ。視覚的にも1音を表すのに2つの子音字が組み合わせられることもあるため、一層その印象が強い。

アルファベットは全部で32文字、そのうち補助記号を用いるものが9文字ある。Q、V、Xは借用語の表記以外には使用されない。

ポーランド語に使用される補助記号は以下の通りである。

- 1) a、ę の下に書かれる り (オゴネク) は鼻音性を示す。鼻母音を持つ言語としては、フランス語やポルトガル語が知られるが、西スラヴ語の中で鼻母音を残しているのはポーランド語のみである。

A	a	[ア]	M	m	[エム]
Ą	ą	[オン]…1)	N	n	[エヌ]
B	b	[ベ]	Ń	ń	[エイン]…2)
C	c	[ツエ]	O	o	[オ]
Ć	ć	[チエ]…2)	Ó	ó	[オ・クレス コヴァネ]…2)
D	d	[デ]	P	p	[ペ]
E	e	[エ]	R	r	[エル]
Ę	ę	[エン]…1)	S	s	[エス]
F	f	[エフ]	Ś	ś	[エシ]…2)
G	g	[ギエ]	T	t	[テ]
H	h	[ハ]	U	u	[ウ]
I	i	[イ]	W	w	[ヴ]
J	j	[ヨト]	Y	y	[イグレク]
K	k	[カ]	Z	z	[ゼト]
L	l	[エル]	Ż	ż	[ジェト]…2)
Ł	ł	[エウ]…4)	Ź	ź	[ジェト]…3)

図3 ポーランド語のアルファベット

(「エクスプレスポーランド語」p.9より転載)

- 2) ċ, ŋ, ś, źに見られる ' (クレスカ) は軟音性を表す。軟音については後述する。óは、かつての長母音の痕跡で、今日では u と同様の発音を持つ。
- 3) żに見られる・ (クロプカ) は歯茎音性を表す。z、ż、źの発音はIPAではそれぞれ [z]、[ɟ]、[ʑ] と表されるが、źの発音は英語の pleasure、vision などの語に現れる [ʑ] と比較すると、摩擦がより強く、こもった響きを持っており、調音法はそり舌に近い。ポーランド式の音声表記では [z]、[ż]、[ź] と表される。
- 4) łはかつて歯音の l であったが、現在は [w] と発音されている。

3.2 母音

字母は9個あるが、音素は口母音6、鼻母音2、計8個である。但し、yを硬子音の後に現れる i の条件異音とする考え方もあり (小原1992: 1144)、その場合、母音音素は7となる。

a [a]	i [i]	u/ó [u]	e [ɛ]	o [ɔ]	y [ɨ]	ą [ɔ̃]	ę [ɛ̃]
-------	-------	---------	-------	-------	-------	--------	--------

u と ó は現在は全く同じ発音で、語によってどちらで綴るかが決まっている。ó はかつては長母音であったが、現在ポーランド語には長母音がない。二重母音も外来語に見られる au、eu (例：auto、Europe) のみである。後述するように、i は軟音符として用いられることがあるが、それによって生ずる母音の連続は、所謂二重母音ではない (例：pies [pʲɛs])。これらの特徴により、ポーランド語の響きはかなり子音の印象が強い。逆にポーランド人が日本語を学習する際には、母音の長短の区別に多少問題を感じるようである。

3.3 子音

ポーランド語の子音には、ロシア語やチェコ語等と同様に、硬子音と軟子音がある。軟子音とは硬口蓋化した子音のことで、発音の際は i を発音する時と同じように唇を横に引き、舌の中央部を硬口蓋に向かって盛り上げる。この子音の音のイメージから、硬口蓋化子音は「軟らかい」子音、すなわち軟子音と呼ばれ、一方、非硬口蓋化子音は、硬子音と呼ばれている。日本語でも同様の現象が拗音、また、イ段の音に多く見られる。軟子音は、ポーランド式の音声転写では、子音の記号にクレスカ (ś, ć 等) や、右肩に ' (p', f' 等) を付すことにより示されるが、IPA では右肩に j を付して表される。

硬子音は以下の21である。上段が無声音、下段が無声音である。

p	f		k	ch/h		s	c		t		sz	cz
b	w	m	g		n	z	dz	ʃ	d	r	ź/rz	ǯ

IPA による音声表記は以下の通りである。

[p]	[f]		[k]	[x]		[s]	[ts]		[t]		[ʃ]	[tʃ]
[b]	[v]	[m]	[g]		[n]	[z]	[dz]	[w]	[d]	[r]	[ʒ]	[dʒ]

軟子音は以下の15である。

p'	f'		k'	ch'/h'		ś	ć		
b'	w'	m'	g'		ń	ź	dź	l	j

I P Aによる音声表記は以下の通りである。

[pʲ]	[fʲ]		[kʲ]	[ç]		[ɕ]	[tɕ]		
[bʲ]	[vʲ]	[mʲ]	[gʲ]		[ɲ]	[ʐ]	[dʐ]	[l]	[j]

英語のアルファベットの発音と異なる文字もあり、例えばポーランドの首都、ワルシャワ (Warszawa) はポーランド語の読み方では「ヴァルシャヴァ」、前大統領のワレサ氏 (Wałęsa) は「ヴァウエンサ」と発音される。作曲家ショパン (Chopin) も、ポーランド語式に読むと「ホピン」となるが、フランス系の名前であり、ショパンが著名人であることから、元来の綴りと発音が尊重されている。そうでない場合には、例えばショパンであれば Szopen のように発音を重視した綴り方に変える必要があったが、現在ではあまり厳しく問われないようである。

今日、同じ発音を持つ ch と h、ź と rz は、単語によって綴り方が決まっている。かつて、ch と h には無声有声の対立があり、h は [x] の有声音の [ɣ] と発音されていた。また rz は、かつては r の摩擦ふるえ音であったが、今はふるえが失われて ź と同一の発音になった。尚、チェコ語にはこの摩擦ふるえ音があり、作曲家 Dvořák などの中に現れる。

軟子音の表記は語中で補助記号が付されないことがある。ń、ś のようにクレスカがあるものは語の中でも ´ が付されることがあるが、後続母音が i の時は付されない。一方、p'、b' のようにアポストロフィーが付くものは、語中で ´ が付されることはない。それは、常に後に i が続くため、軟子音であることが判別できるからである。逆に、i の前には硬子音が現れることはない。軟子音には以下のような表記法に関する決まりがある。

1) アポストロフィーが付く軟子音

i の前では ´ を付けず、単に b、p…と綴る (例: wino, kino)。

i 以外の母音の前では、bi、pi のように i を付け、軟子音であることを示す。この場合 i は母音ではなく軟音符である (例: pies)。

2) クレスカが付く軟子音

iの前では´を付けずに綴る(例: dziś)。

i以外の母音の前では、zi、siのようにiをつけて軟子音であることを示す(例: zielony, nie, dziadek)。

語末か他の子音の前に来る時には´を外さず ź, ś・・・と綴る(例: coś, środa, słońce)。

3) lとj

常に表記は変わらない。

以上のことから、iの前にある子音は常に軟子音であることがわかる。

対応する硬子音を持つもので補助記号を付して軟子音であることを示す必要があるのは、ń, ś, ź, ćが語末か他の子音の前に現れる時のみである。アルファベットに加えられているのも、この4つのみである。

以上の子音をIPA表にまとめてみる。

	両唇音	唇歯音	歯茎音	後部歯茎音	歯茎 硬口蓋音	そり舌音	硬口蓋音	軟口蓋音
破裂音	p b p ^j b ^j		t d					k g k ^j g ^j
鼻音	m m ^j		n				ɲ	ŋ ŋ ^j
ふるえ音			r					
破擦音			ts dz	tʃ dʒ	tɕ dɕ			
摩擦音		f v f ^j v ^j	s z	ʃ ʒ	ɕ ʑ	ʂ ʐ	ç	x
接近音	(w)*						j	(w)*
側面接近音			l					

* 有声両唇軟口蓋接近音

図4 ポーランド語の子音の体系

下段に軟子音を記した。

上記は音韻レベルの体系であるが、他に音声レベルで [ɸ], [ɣ] など

異音として現れるものもある（小原1992：1144）。ここでは日本語の音声にも関わる /n/ の異音、[ŋ] [ŋʲ] のみを記した。

軟子音の ch/ h' の音声記号として [ç] を用いたが、[xʲ] と表す場合もある。また、[ɲ] で表した ń は、IPA に対応する記号なしとして、ポーランド式音声転写の記号である [ɲ] で歯茎硬口蓋鼻音を表している文献もある（小原1992：1144）。

また、そり舌音が表に加えてあるが、それは sz [ʃ]、ż/rz [ʒ] と表されている音をそり舌音とみなし、[ɕ]、[ʑ] と音声表記する考えもあるからである（神山1996：49）。そり舌音 [ɕ]、[ʑ] は中国語の sh、r の綴りに現れるが、現にポーランド人はこれらの音をポーランド語の sz、ż/rz と対応させ、同じと認識しているようである。ポーランド語の [ʃ]、[ʒ]、[tʃ]、[dʒ] は、英語や仏語、独語などの場合と調音法がかなり異なる。舌先を丸め上げるようにし、かつ唇の軽い丸めを伴うので、響きはやや暗くこもり、摩擦もより強い。この現象を、[ʃ] と [ʒ] に軟口蓋化が加った結果として生じる前舌面のへこみであるとし、精密に軟口蓋化の補助記号を用いて [ʃ̠] [ʒ̠] と表記する場合もある（神山1996：46）。

ポーランド式音声転写では、上記の [ʃ] [ʒ] [tʃ] [dʒ] を含め、IPA とは異なる表記がいくつか見られる。歯茎音、後部歯茎音、歯茎硬口蓋音は以下のように表される。

	歯 茎 音	後部歯茎音	歯茎硬口蓋音
破擦音	c dz	ć dź	ć dź
摩擦音	s z	ś ź	ś ź

図5 IPAと異なるポーランド式音声転写

また、補助記号 ˑ で表される硬口蓋化は ˑ を用いて [pˑ]、[bˑ] のように表される。

次に比較のために、IPA 表記による日本語の子音体系を示す。

図6の下段に示したのは、イ段、拗音に見られる硬口蓋化音である。二、ニヤ行の子音 [ɲ] は、[nʲ] と表す場合もある（斎藤1997：89）。シ、チ、ジ／ヂなどの子音は [ɕ] [ʑ] でなく、それぞれ [ʃ] [ʒ] で代用される場合もあるので、ここでは両方記した。しかし、同じ記号 [ʃ] [ʒ]

	両唇音	歯茎音	後部歯茎音	歯茎硬口蓋音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	声門音
破裂音	p _j b _j p _j b _j	t d				k g k ^j g ^j		
鼻音	m _j m _j	n			ɲ	ŋ ^j ŋ ^j	N	
はじき音		f ^j f ^j						
破擦音		ts dz	tʃ dʒ	tʃ dʒ				
摩擦音	Φ	s z	ʃ ʒ	ʃ ʒ	ç			h
接近音					j	ɰ		

図6 日本語の子音の体系

で表されるポーランド語の音とはかなり異なる。

音声レベルでは、[β] [ɣ] [ɦ] など /b//g//h/ の異音として現れるが、ここではポーランド語でも異音として現れる [ŋ] 等、撥音の異音として現れる音声のみを記載した。以上をポーランド語の体系と比較し、ポーランド人の日本語発音上の問題点を考えてみたい。

3.4 ポーランド人の問題点

ここで述べるポーランド人の日本語発音上の問題点は、ポーランド人学習者へのインタビューと、筆者のポーランド滞在中の日本語教育経験に基づくものである。

一般的に、ポーランド人には単音レベルで大きな問題は見られない。両言語の音韻体系を比較すると、ポーランド語には存在しない日本語の音が幾つか挙げられる（ハ行の [h] [Φ]、撥音 [N]、ラ行 [f] 等）が、いずれも習得に困難は見られない。近似の音声 [x] [t] 等で代用するか、その音を基に正しい日本語の音声を知得していると考えられる。撥音に関して、「本を」が「本の」に、「千円」が「千年」に聞こえるような問題が観察されることがあるが、鼻音化するように指導すればよい。また、ラ行に関しては、r でも l でもない日本語のはじき音はやや困難なようであるが、巻き舌にしない [r] を発音するように指導すれば大きな問題にはな

らない。

アジア系の学生に観察されることの多い、シ／チ／チュ／ツ／ス等の区別にも困難がない。それはポーランド語に、硬子音 s [s]、c [ts] に対応する軟子音 ś [ɕ]、ć [tɕ]、及びそれぞれの有声音が存在するためと考えられる。

[ŋ] は両言語で異音として現れる。撥音に現れる [ŋ] は、「bank」という語を発音する際の要領で「本が」と発音させれば問題はないが、一方、所謂ガ行鼻濁音の [ŋ] は難しいようで、「小麦粉」が「こむにこ」のように発音されてしまうことがある。

ポーランド人にとって恐らく最も大きい日本語の発音の困難点としては、促音、長音、撥音の拍の問題が挙げられよう。ポーランド語は長母音を持たないため、特に拍感覚に関して意識化させることが必要である。また、アクセントの問題もある。ポーランド語は原則として語末から2番目の音節に強勢が置かれる固定アクセントの言語のため、日本語でも句・節のレベルで類似したアクセントを置く傾向が見られ、「わたしいが、日本語を勉強しているのおは」のような発話になる学習者もいる。また、語のレベルでは、アクセントの異なる同音異義語の発音の区別を苦手とする傾向がある。以上の問題には、音の長短や上昇下降を図示したり、テープを利用するなどして、繰り返し指摘し、意識させることが必要である。

4. ポーランド語話者のための日本語音声表記

次に、ポーランド語話者のための日本語音声表記を試みる。

日本語教育において、学習初期で仮名使用が困難な時期や、学習者が仮名習得を必要としない場合には、ローマ字が使用されることが多い。ローマ字の綴り方には幾つかの方法がある。ヘボン式、訓令式、日本式、他に日本語の教科書で独自に使用されている方式等である（図7参照）。日本語学習者にとって最適な方式は、学習者の母語により異なる。必要によっては、従来の方式によらない、学習者の母語の文字表記習慣に則った柔軟な音声表記を採用することが望まれるであろう。特に、読み書きを必要としない短期間の学習の場合は、ローマ字を使用することによる不要な負担を学習者にかけることなく、正しい発音が直ちに伝わることを望ましい。

ローマ字は明治18年にヘボン式と日本式が提唱され、以来両者が激しい対立を見せていたが、両者を統一しようとした政府が昭和12年に訓令式を

制定した。以後、一本化されることはなく併存の結果になったが、現在では昭和29年の内閣訓令による改定版の訓令式が学校教育の中では望ましいとされている。しかし、人名、会社名などの固有名詞は、特に英語話者にとって発音が認識されやすいヘボン式で書き表されることが多いようである（天沼1989：507）。

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
*kwa							
sa	si <u>shi</u>	su	se	so	syā	syu	syō
					<u>sha</u>	<u>shu</u>	<u>sho</u>
ta	ti <u>chi</u>	tu <u>tsu</u>	te	to	tyā	tyu	tyō
					<u>cha</u>	<u>chu</u>	<u>cho</u>
na	ni	nu	ne	no	nyā	nyu	nyō
ha	hi	hu <u>fu</u>	he	ho	hyā	hyu	hyō
ma	mi	mu	me	mo	myā	myu	myō
ya		yu		yo			
ra	ri	ru	re	ro	ryā	ryu	ryō
wa				*wo			

ga	gi	gu	ge	go	gyā	gyu	gyō
*gwa							
za	zi <u>ji</u>	zu	ze	zo	zyā	zyu	zyō
					<u>ja</u>	<u>ju</u>	<u>jo</u>
da	zi *di <u>ji</u>	zu *du	de	do	zyā	zyu	zyō
					*dya	*dyu	*dyō
					<u>ja</u>	<u>ju</u>	<u>jo</u>
ba	bi	bu	be	bo	byā	byu	byō
pa	pi	pu	pe	po	pyā	pyu	pyō

図7 訓令式・日本式・ヘボン式のローマ字綴り方

（訓令式が基準。下線はヘボン式。*は日本式。但し、kwa、gwa、woは特定の語にのみ用いられる。）

日本語のローマ字表記でポーランド人に誤った音声を想起させる可能性

があるものとしては、訓令式の ti、ヘボン式の chi、ji 等が挙げられる。特に chi 「チ」は、ポーランド語では「ヒ」と読めてしまう。他にも母音の u は円唇で発音されやすいため、特に中舌母音的な「ツ」[tsu̯] は、ポーランド語では tsu よりも cy の方が発音が近い。

特殊音素は以下のように表される。長音はそれぞれ記号を付すが、日本語の教科書では母音を重ねて書くことも多いようである。促音は基本的に後続の子音字を重ねて書く。撥音は、後に母音・半母音が現れる場合には n の右肩に' に付け、ナ行・ニヤ行の音と区別する。ヘボン式では両唇音の前の撥音は m で表す。

	長 音	促 音	撥 音
訓 令 式	ā ii ū ei/ē ō	bottyan, nessin	sen'en, konbini
ヘボン式	ā ii ū ei/ē ō	botchan, nesshin	sen'en, kombini
そ の 他	aa ii uu ei/ee oo		señeñ, koñbini senen, konbini

図 8 特殊音素のローマ字表記

以上の点に留意し、ポーランド語話者のための日本語ローマ字表記を開発した(図9)。

注意点として以下のことが挙げられる。

- 1) [u] はポーランド語では円唇母音なので、日本語のウを発音する際には口唇の緊張を解くよう指摘する。
- 2) ポーランド語の [h] は軟口蓋の摩擦音であるため、フは[f]で表した。発音の際には下唇をかまないことを注意する。
- 3) ラ行には [r] を用いたが、巻き舌はしないことを指摘する。
- 4) ザ行、ジャ行は、ポーランド語でも破擦音と摩擦音の双方が存在するため、語中の位置により適当な方で表記し分けることが可能である。
- 5) 拗音は子音字の後に i を添えることにより軟子音(硬口蓋化子音)になるポーランド語の綴り方を採用している。但し、語の中では例えば「シアトル」と「シャトル」とを区別するため、「si'atoru」と「siatoru」のように書き分ける必要があろう。
- 6) 撥音は音声レベルで [m] [n] [ɲ] [ŋ] [ɳ] [̃] (例: 本屋 [hoi̯ja]) のような異音が見れるが、ポーランド語の音声に現れないのは [ɳ] の

みで、その音声が発せられなくても特別目立つものではない。後続子音の調音点に同化する現象はポーランド語でも見られるため、各音声をローマ字表記の際に異なる記号で書き分ける必要はないと思われるが、前述の「本屋」のような場合には、鼻母音化する指摘が必要な場合もある。

直音

a	i	u	e	o
ka	ki	ku	ke	ko
sa	si	su	se	so
ta	ci	cy	te	to
na	ni	nu	ne	no
ha	hi	fu	he	ho
ma	mi	mu	me	mo
ja		ju		jo
ra	ri	ru	re	ro
ła				ło
				n

拗音

kia	kiu	kio
sia	siu	sio
cia	ciu	cio
nia	niu	nio
hia	hiu	hio
mia	miu	mio
ria	riu	rio

ga	gi	gu	ge	go
dza	dzi	dzu	dze	dzo
za	zi	zu	ze	zo
da	dzi	dzu	de	do
	zi	zu		
ba	bi	bu	be	bo
pa	pi	pu	pe	po

gia	giu	gio
dzia	dziu	dzio
zia	ziu	zio
dzia	dziu	dzio
zia	ziu	zio
bia	biu	bio
pia	piu	pio

図9 ポーランド人のための日本語音声表記

5. 今後の課題

本稿では、特にポーランド語話者のための日本語音声表記を試みた。今後、この表記と従来のローマ字表記とで学習者の発音を比較し、その有効性と問題点を明らかにしていきたい。特殊音素に関しては、今回協力を得

たポーランド人の日本語学習者によれば、ヘボン式が適当であろうとの意見であった。長音に関しては一部の日本語教科書に見られる母音を重ねる方法であると引き音の部分が強調され、アクセントが付く弊害があるかもしれないとの指摘を得た。今後、日本語学習経験のないポーランド人も対象とし、語や文の単位の発音も調査していきたい。

参考文献：

- 天沼 寧 (1989) 「ローマ字のつづり方」 日本語教育学会編『日本語教育事典』 pp.506-508 大修館書店
- 石井哲士朗 (1992) 『エクスプレス ポーランド語』 白水社
- (1998) 「ポーランド語」 東京外国語大学語学研究所編『世界の言語ガイドブック 1』 pp.295-312 三省堂
- 小原 雅俊 (1992) 「ポーランド語」 亀井孝等編『言語学大辞典』 第3巻 世界言語編 下-1 pp.1142-1161 三省堂
- 神山 孝夫 (1996) 『日欧比較音声学入門』 鳳書房
- 小出 詞子 (1989) 「長音の書き方」 日本語教育学会編『日本語教育事典』 pp.489-490 大修館書店
- (1989) 「促音の書き方」 日本語教育学会編『日本語教育事典』 p.490 大修館書店
- (1989) 「撥音の書き方」 日本語教育学会編『日本語教育事典』 pp.491 大修館書店
- 斎藤 純男 (1997) 『日本語音声学入門』 三省堂

第2章に関しては以下の文献を参照した。

- 森安 達也 (1992) 『〈ビジュアル版〉世界の歴史9 ビザンツとロシア・東欧』 講談社
- 中嶋 嶺雄等監修 (1992) 『国際情報大事典 P A S P O』 学習研究社
- 伊藤 孝之等監修 (1993) 『東欧を知る事典』 平凡社

わだ やえこ (留学生センター非常勤講師)

Romanizing Japanese for speakers of Slavic languages: (1) The case of Polish

WADA, Yaeko

The purpose of this study is to consider how to romanize Japanese for speakers of Slavic languages. Romanization (Roma-ji) is very useful in enabling Japanese language learners to grasp Japanese pronunciation quickly. Especially those who study Japanese for a comparatively short time period or who do not need to learn Japanese characters require romanized Japanese to represent Japanese sounds properly. However, some romanized spellings may suggest the wrong sounds to learners, because certain letters correspond to different sounds in different languages. Therefore, the method of romanizing Japanese should reflect the learner's native language. This paper proposes a method of romanization for speakers of Polish.

Furthermore, a knowledge of the phoneme system of the learner's native language is of great help in giving proper instruction in pronunciation. The IPA (International Phonetic Alphabet) is widely used today for phonetic transcription and it is extremely useful in gaining a general idea of the pronunciation of unfamiliar languages. In this paper Polish phonemes are listed using the IPA, to permit close comparison with Japanese and discussion of difficulties for Polish speakers in pronouncing Japanese.